（書評）サイモン・ジョンソン／ジェームズ・カク『13 人の銀行家』

Simon Jonson / James Kwak

The 13 Bankers: Wall Street Takeover and The Next Financial Meltdown

今回の金融危機は、現代の金融市場と金融機関のビジネスモデルに潜む致命的欠陥を明らかにした。各国政府と金融当局は前例のない措置と莫大な財政資金投入で、金融機関を救済せざるを得なかった。いまでは、金融産業をこれ以上野放しにできないというのが世界の常識になっている。

しかし、アメリカで 2010 年 7 月に成立したドッド＝フランク法は、当初の期待に背き、ウォール街に寛容な作文に終わった。この間政府は破綻した銀行を他の破綻した銀行に吸収合併させ、残った 6 社のシェアは、大幅に上昇した。政府支援をテコとする急速な利益回復を背景に、経営陣は引き続き法外な報酬を取り続けている。破綻銀行の経営者の中で厳しい処罰を受けた者はいない。

なぜアメリカでは、議会も監督機関もウォール街をきちんと規制し、責任を取らせることができないのか。こんな有様で、同様の危機の再発を防止できるのか。そもそもなぜ、ウォール街がこれほどの厄災を引き起こしたのか。何千人もの経済学者や監督責任者はいったい何を考えていたのか、これは誰もが抱く素朴な疑問であろう。

本書によれば、アメリカでは 1990 年代にウォール街のカネと人脈が政治を支配するようになり、「金融の論理」がアメリカの支配的イデオロギーになった。著者の一人Ｓ．ジョンソンはこれを「密かなクーデタ」と呼んだが、ここに金融危機の秘密を解き明かす重要な鍵がある。これが本書の基本的メッセージである。

米議会「金融危機調査委員会最終報告」（本年１月）は、ウォール街の利益優先と監督機関の無責任な規制緩和が今回の危機を招いた経緯を詳細に記録したが、本書を下敷きにして読めばその背景がさらに明確に理解できるであろう。